◇松蔭女子学院の中期ビジョン◇

I. 創立 130 周年に向けて

松蔭女子学院は 2022 年に創立 130 周年を迎える。それにあたって、学院としての教育の根幹である人間形成に関して、どのような生徒や学生の成長を望んでいるかを明確化しておきたい。2017 年度に松蔭女子学院のモットーとして、「一粒のからし種」を制定し、それに基づいて、松蔭中学校・高等学校（以下「中高」）では Open Heart, Open Mind、神戸松蔭女子学院大学（以下「大学」）では、Open Yourself, Open Your Future というモットーを定めた。
上記のモットーに基づく人間形成のあり方が、中高・大学それぞれの組織で具体化される際に、それらが目指す中長期的な到達点として、聖公会キリスト教主義に基づく本学院が置かれている神戸の地域性に根ざした目標を定めるものである。

Ⅱ．本学院の教育目標

本学院の教育目標は、モットーの「一粒のからし種」を具体化し、どのような養分を与えて大木にまで育て上げるかということを具体化することである。
本学院では、中高・大学を通じての学院の教育目標として、次の 3 つを中心に据えることとする。

1　多様性の理解と受容

生徒・学生が、自分は、神の似姿（Image of God）によって創られ、他者と比較することができない、価値ある「個」であるということへの認識を深めるとともに、自分と異なる「他」が存在するという多様性を受け入れる。

2　社会に貢献できる力

生徒・学生が、自己を確立した上で、さらに視野を拡げて、社会の中で他者と共に在ることの大切さを認識し、他者と協力・協働することによって、主体的に行動できる力をもった人として成長する。

3　持続可能な社会への意識改革

生徒・学生が、周りの自然環境・社会環境を正しく理解して、自然を愛し、自然と共生するとともに、共同体社会の構成員として、地球環境に配慮して、将来にわたって持続可能な社会を維持していこうとする態度を育成する。
以下、上記の教育目標について、聖書からの引用を加えながら、説明を加える（聖書からの引用は、日本聖書協会による「聖書協会共同訳」(2018) による)。

1. 多様性の理解と受容

「神は人を自分のかたちに創造された。神のかたちにこれを創造し、男と女に創造された。」(創世記 1: 27）と創造物語は述べる。「創造した」のヘブル語「バラー」は、姿かたちを確認することができないイメージに沿ってという、神の内面性をあらわしている。人間に自由意志が付与された点で、人間は神に最も似ているというのがユダヤ教のラビ（聖職者）たちの見解である。この自由意志によって神に応答するのが人間本来の姿となる。被造物への愛によって、神はこの世界を創造されたが、人間は、神のように、神や他者を愛することができる存在であり、この愛への明確な認識は、被造物の中で人間だけがもつ。自分と異なる「他」の存在のはじめはアダムとエバであるが、人種、国籍、生活習慣、肌の色、宗教、信条などが異なった人たちを価値ある存在として認め、共に向き合う（創世記 2: 20）ことが人間本来の生き方となる。

本学院の教育は、まず、自分自身のアイデンティティを明らかにし、一人一人の「個」を確立し、自分が大切な存在であるとの意識をもった上で、自分と異なる「他」を受け入れ、尊重していく意識を醸成していくことである。

中高・大学という共同体には、多様な構成員がおり、上述の通り、人種、国籍、生活習慣、肌の色、宗教、信条、文化、伝統、意見、言語などに多様なあり方があり得ることを理解し、それらをすべて受容していく点に、キリスト教主義の教育機関、特に聖公会の学校らしさがあると考える。多様性が重要であると認識することにより、多様な人々、多様なことがらが存在する場合にも、それを受け入れ、自然なものとして捉えられるような教育を目指すことになる。

ただし、多様性を認識することと、それを受け入れることとの間には簡単には縮めることのできない距離があるのは事実である。特に、中学生については、まず、世の中に多様な人たちがいるのだということを理解することから始め、高校生・大学生になれば、進んで、多様性の様々なあり方を抵抗なく受容できるように指導すべきである。

2. 社会に貢献できる力

コリントの信徒の手紙一の 12 章で、聖パウロは、教会を人間の体に喩え、「体は一つでも、多くの部分から成り、体の全ての部分は多くても、体は一つ」であり、足が「私は手ではないから、体の一部ではない」と言ったり、目が手に向かって「おまえは要らない」と言って他の存在を否定したりすることはできないと述べる。それに留まらず、見劣りする部分も、かえって尊いものとして体を一つにまとめあげているのが教会であると聖パウロは言う。全体と個とが生きた統一体として存在し、個々の固有性を発揮すればするほど、全体が生かされてくる。これが有機体の本質なのである。

自己を確立し、多様性を受容しても、そこにとどまっていては、ばらばらの「個」が互いに関係をもたずに存在しているにすぎない。多様性の認識・受容から一歩進んで、多様性の中で「他」と協働していく力につなげていかなければならない。確立された「個」は、「他」と協働（共働）して、社会的存在となるのである。中学から大学（院）にかけての人間の成長という観点からも、他と協働する態度を学ぶことは重要である。

社会に貢献することのできる人材の育成はキリスト教主義の学校として大切な教育目標であり、適切な問題提起ができる人材の育成を目指す必要がある。仮に、一気に問題解決に至ることを目標とするのが難しくとも、生徒・学生の成長段階に応じて、できる範囲の行動に移すことができる人材を育成していかなくてはならない。

3. 持続可能な社会への意識改革

ノアの洪水の後、神は「すべての肉なるものが大洪水によって滅ぼされることはもはやない。洪水が地を滅ぼすことはもはやない。」（創世記 9: 11）とノアと彼の息子たちに約束し、自然を正しく管理することは人間の使命であることを再確認している。人間は生態系保全の責任を担っているが、人間が、被造物に対して蔑視したり破壊したりすることは、土を「耕す」だけでなく、それを「守る」ように神から委託された（創世記 2: 15）意図に反する行為である。

1990 年、全聖公会は、宣教指標の 5 番目に「自然と共生することにより、地球の命を守り、育む」を加えた。国連においても、「地球の環境を悪化させない。富める国でも貧しい国でも広がる一方の格差の解消やジェンダー平等などを 2030 年までに達成する」という SDGs（Sustainable Development Goals−持続可能な開発目標）を推進している。

社会への貢献は、人間関係だけに留まらず、人間と周りの自然環境を含めた生態系の問題として捉える必要がある。気候変動など、自然が脅かされる現象が顕著になっている今の世界にあって、地球環境や自然環境の保全を含む、持続可能な社会の実現に真正面から取り組むことが緊急課題になっている。

例えば、エネルギー源として電力を利用することには、地球上の他の資源の消費を抑制し、環境保全に貢献するという利点があるとともに、電力を得るための資源の確保が新たな問題となってくる。エネルギー源の確保には、それぞれの方式ごとに、自然環境の破壊の防止策や、経済的・社会的影響への配慮が必要となることが多く、資源の再利用にも、多角的な観点から考える必要があるのである。

自然環境・社会環境への関わりに際しては、絶対的な正解を提示することが困難な場合も多い。それを十分に踏まえて、まず、多様な問題が存在することに気付き、持続可能な社会を実現し維持していくために、相対的に一歩でもよい方向へ向かう態度を育成することが必要である。

Ⅲ．目標実現のために

１．受信力を前提とした発信力の向上

社会貢献を可能とし、自然環境・社会環境の保全に貢献するための基礎力として、本学院の教育の特色として、生徒・学生の受信力を高めた上で、自分が理解し把握した様々な問題の解決案を社会に向かって提起していくことができる発信力を高めることを目指すべきである。中高・大学を通じて、受信し学んだことをどのように発展させて発信していくか、どのように表現し社会に活かしていくかという力を育成することが重要であり、社会に出てから活用できる技能・資格にも結びつけていく必要がある。

発信力は一方向的なものであってはならず、発信の段階でも、相手の存在を意識し受信しつつ発信するという両方向性をもった「コミュニケーション力」に発展していかなくてはならない。論理的な思考力を身に着け、ことばの理解力・運用力を高めるとともに、社会に向かって自分の思い・考えを発信する能力を育成することを目指す。

2. 地域貢献の様々なあり方

社会貢献として一番身近かに感じられるのは地域貢献であろう。本学院は、神戸という国際性にあふれる街に位置している。特に、海と山の両方に特色をもつ灘区という環境にあり、学院の近隣には、本学院が今までにも貢献してきている多くの地域がある。地域的であるとともに普遍的な貢献の様々な形態が考えられ、工夫していける余地は大きい。

3. 女子教育の利点

松蔭女子学院は、女子校・女子大という形態をもった、女子教育を特色とする教育機関である。多様化と女子のみの教育は、必ずしも相反するものではなく、むしろ、男性がいないために、様々な事柄に女性のみで取り組まねばならない結果、多様な経験ができるというメリットがある。したがって、松蔭女子学院の女子教育機関という性格のもつメリットを活かし、共学校との差別化をより明確にしていく必要がある。

また、それが、大学のモットーの一つである Open You Future という形で、学院を卒業した後の人生において、女性の社会的地位の向上にも結びつくような意識の育成につながっていくと考える。

◇神戸松蔭女子学院大学◇

I. 教育理念

学校法人松蔭女子学院は、学院創立 125 周年を迎えた 2017 年に学院モットー「一粒のからし種」を制定した。それと同時に、神戸松蔭女子学院大学のモットーを制定し、”Open Yourself, Open Your Future” とした。

学院モットーは、学生たちが絶えず自分を見つめ直して古い殻を破り、新しい自分を発見することによって個性を確立し、社会に貢献する女性として成長することと、大学教職員がそれを支援し学生の成長を促すことを示している。大学モットーは、無意識のうちに自分を閉じ込めてきた殻を破って自分を解放し心を開いて自分を成長させていく女性、卒業後の自分の未来を拓く女性となることを期待するものである。

この大学モットーのもと、本学は学則第 1 条に示すように、聖公会キリスト教主義に基づく人格の完成と心身ともに健康な社会人の育成を期して高い学問的教養を授けるとともに学術研究の場として深く専門の学芸を研究教授することを目的としている。その目的の達成に向けて、大学の教育の特色を、「キリスト教の精神：他者を思いやるキリスト教の愛」を持って、「実践的な教養：深い教養知識と広い実用技術の融合」を学び、「キャリア：個性豊かに生きる自分だけの人生」を切り拓いていく女性を育てることとしている。

Ⅱ．大学の中期ビジョン

１．2022 年度までの教育方針

上記の教育理念は、大学の学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）にある「キリスト教の愛の精神を基本とした女子教育を通じて、他者への思いやりの心をもって社会に貢献する人材を育成することを目標としている。」につながっている。すなわち、本学の教育は「殻を破り、心を開いて成長する」「自ら未来を拓く」「他者を受け入れ、思いやりの心を持つ」「社会に貢献する」という言葉で示すことができる。

教育理念の実現に向けて、学院創立 130 周年である 2022 年度までの大学の教育方針を以下に示す。

（1）他者を受け入れ信頼することから出発する

人は自分の力だけで成長することはできない。まず他者を受け入れて信頼することから出発すれば、相手もそれに応じてくれ、良い相互作用が生まれる。

教職員もまた学生たちを受け入れ信頼するところから出発する。キリスト教教育、親密さと信頼を育む学内の活動や施設の整備を通じて、心を開くことのできる安心と落ち着きのあるキャンパスとする。

（2）成長し続けるための土台をつくる

言葉の力は、成長し続けるための土台として最も重要である。コミュニケーションのツールであるとともに、自分自身を見つめ直すため、新しい知識を得るため、考えを深めるために不可欠である。

日本語力を高める授業を設定するだけでなく、できるだけ多くの授業と活動で日本語力を高める取り組みを進める。また、英語を中心とした外国語科目の充実とともに、外国語を使う機会を授業外でも設ける。

（3）自ら未来を拓く力をつける

どのような方向に成長すればよいのかわからないままにただ成長することはできない。社会を

知り、夢に向かう道筋を描くことで、目標を設定して努力することができる。夢や目標が途中で変わることはあるが、目標を持って努力した経験とそこで学んだことは次の成長の糧になる。

学生に対して学びの目標と目標を実現する道筋を示し、目標に向かう学生の努力をサポートする。

（4）学び合い成長する

人は他者とのかかわりの中で成長する。人から学ぶとともに、人に教えることで自身の学びがさらに確固としたものになる。そして、社会において必要となる、主体性を持ちながらチームとして働く力をつけていく。

グループワークやチームで取り組む課題解決型の授業や活動をできるだけ多数設定するとともに、ピア学習システムを整備する。

（5）思いやりの心を持ち社会に貢献する

思いやりの心を持つとともに、社会の中に積極的に入っていき試行錯誤しながら社会に貢献する力を養う。それは、主体性を持ちながらチームとして働く力を養うことにもつながる。

学生たちが地域や社会と関わり活動する場を設けるとともに、学内の活動においても主体性を持ちながらチームとして働く力を養えるよう支援する。教職員もまた研究や学内外の活動を通して地域・社会に貢献していく。

２．2022 年度までの目標

（1）全体目標

2019 年度の入学定員を維持して全学年で定員前後の在学生数とすることで、2022 年には在学生数 2300 名、教育の質の高さで評価される大学であることを目標とする。そのためには、大学全体で教育力を高めて学生が成長することを実績とともに示すとともに、大学入学共通テストをはじめとする高大接続改革に対応し、偏差値中位層の受験者を増やして大学全体の偏差値を上げていく。また、学修成果、資格取得、就職・進路、受験生・入学生データなどを集約・活用する IR 部門を設置し、データに基づく大学運営を行う。

（2）学びの目標設定と学修成果の測定

平成 30 年 6 月に閣議決定された教育振興基本計画において、「大学教育を通じて『学生が何を身に付けたか』という観点を一層重視するともに、いかなる評価の基準や方法に基づいて、個々の学生の学修成果の把握・評価を行い、大学として卒業を認定・学位を授与したかについて、社会に対して説明責任を果たすことが求められる。」と述べられている。本学においても、カリキュラムの体系化と授業での到達目標を示すことが進められてきたが、学位プログラムとしてふさわしい明確な学修目標を設定しているか、教学マネジメント体制を整え、学位プログラム共通の考え方やルーブリック等の尺度（アセスメントプラン ）に則って点検・評価を行う。卒業研究の到達目標を達成できるよう、各科目の到達目標を定めていき、学科における学修成果の測定を行う。

資格取得は、学修成果の測定だけでなく、達成感をもたらし自己効力感を高めるという意味で重要である。また、主体性を持ちながらチームとして働く力、コミュニケーション力を高めるために授業外活動への参加が望まれる。授業科目の到達目標だけでなく、資格取得や授業外での学びも含めた「学びの目標」を学生に示すことを進めていく。

（3）学び続けることを可能にする力の養成

ディプロマ・ポリシーの汎用的技能の基本は言葉を理解し表現する能力である。全学共通科目と学科の導入教育科目の連携を一層進めて、読解力と文章作成力の向上を目指す。また、教養を身につけ、自分の考えを表現するためには、座学だけでなく主体的に取り組む学びが不可欠であ

る。グループワークを取り入れた授業やチームで課題を解決していく授業を増やす。特に、全学共通科目はアクティブ・ラーニング主体へと転換する。

（4）学び合う体制の整備

語学力・表現力を磨く授業の展開とサポート体制の充実を目指すとともに、授業及び授業外で学び合う仕組みを整備して、授業外学習を促す。学生の学び合いは、ディプロマ・ポリシーの「高度なコミュニケーション能力」「学んだことを地域・社会に還元し、その中で他者と調和して生きていく」態度の養成につながる。

（5）学生支援と学内活性化

安心感を持って心を開くことのできる落ち着きあるキャンパスとなるよう、学生支援の方針に基づき学生支援体制を整備・運営する。

他者との協働や各自が主体的に動きながらもチームで課題解決する経験が、ディプロマ・ポリシーの「一貫した責任をもつ経験を通じて、自立した女性として、自己を確立することに努力する」態度・志向性を養うことにつながる。クラブや同好会、学生たち自身が大学を活性化する取り組みをこれまで以上に設けて、快適で活発なキャンパスづくりを進めていく。

（6）キャンパス整備

安心感を持って心を開くことのできる落ち着きあるキャンパス整備を進める。現在のキャンパスの雰囲気を維持しつつ、部分的な増改築で現在の学生の利便性を向上する。2019 年度よりキャンパス整備計画の検討を開始し 2022 年度までに整備する。

（7）地域貢献の推進と拠点の整備

本学ディプロマ・ポリシーの「学んだことを地域・社会に還元し、その中で他者と調和して生きていくことができる」「身につけた専門的知識を自らのキャリアに生かしつつ、社会に貢献する」態度・志向性を養うために、社会連携・社会貢献に関する方針を作成し、地域連携活動やボランティア、産学連携など社会の中で学生が学ぶ機会を増やして学生の参加を促す。

これまでの活動のさらなる活性化に加えて、学生の学びの場として大学コンソーシアムひょうご神戸の活用を促進するとともに、学外評価者の意見を参考にした新たな取り組みを始める。

地域連携、社会貢献をバックアップする学内組織を整備・強化するとともに、学外の地域貢献拠点の整備を目指す。大学会館をはじめとする学外施設の役割の評価を行い、既存施設の充実あるいは新施設設置どちらの方策を取るかを決定する。

３．新型コロナウイルス感染症の影響と 2022 年度までの目標の追加

新型コロナウイルス感染症の拡大により、2020 年度前期は授業開始を遅らせた上ですべての授業を遠隔授業の形で始めることとなった。前期途中より実験・実習など必要性に応じ教室での対面授業も実施した。しかしながら、2020 年度は最後まで多くの授業を遠隔で行うこととなった。また、クラブ・サークル活動は中止ないし感染症対策を行った上での制限付きでの活動となった。新型コロナウイルス感染症は 2020 年度中に収束する目途は立っておらず、2021 年度までこのような状況が継続することは確実である。2021 年度授業についても対面授業と遠隔授業を併用して実施する。

新型コロナウイルス感染症自体がワクチン等の普及により 2021 年度中に収束したとしても、コロナ前の社会に戻るのではないと予想されている。特に、これまで以上のスピードで進んだ社会のデジタル化による日常生活や働き方の変化は後戻りすることがないだろう。教育理念に掲げた「自分を成長させていく女性、卒業後の自分の未来を拓く女性」を育成していくためには、こういった社会の変化に対応できる力の養成が必要である。

本学では、「2022 年度までの目標」の「（３）学び続けることを可能にする力の養成」に沿って、新型コロナウイルス感染症が拡大する前の 2019 年 6 月に教育改革プロジェクトを立ちあげて、今後の全学共通科目の方向性などを示した答申をまとめて 2020 年 3 月に学内に発表した。この答申では、生涯にわたって学び続けることができる力として、「課題を見出して解決策を提案できる力」と「情報技術を理解し、主体的に活用できる力」を全学で養成することを打ち出した。具体的には、前者の養成のために、本学の学びの中核として各学年にゼミ形式の授業を配するとともに、全学共通科目にもゼミ形式の授業、PBL（Project-Based Learning：課題解決型学習）を取り入れた授業の配置を進めていく。そして、後者の養成のために、全学共通科目への数理統計教育科目の配置、情報教育の強化とノート PC 必携化を進めることを提案した。この後者の力の養成は、まさに上で述べたコロナ後の社会の変化に対応できる力に繋がる。

「学院創立 130 周年に向けた中期ビジョン」に変更はないが、上記した状況を受けて、「2022 年度までの目標」の「（３）学び続けることを可能にする力の養成」に以下の文章と表を追加する。

教育改革プロジェクト答申（2020 年 3 月）において、大学モットー、学位授与の方針（ＤＰ）、中期ビジョンの教育方針に基づき、大学全体で共通して養成すべき力をまとめた（下表）。この答申に沿った教育改革、特に、今後の社会の変化に対応できるよう、情報技術を理解して主体的に活用できる力の養成を進める。在学生については、2020 年度の遠隔授業実施によって進んだ教育の ICT 化と学生の ICT 能力の向上を、学習管理システムや各種アプリケーションソフトウェアの提供と利用徹底によって維持・発展させていく。2022 年度入学生からはキャンパスでの PC 必携化により、情報教育科目だけでなく学科専門教育科目を含む幅広い授業で情報技術を主体的に活用できる力の養成を行う。そのために、キャンパスでの PC 必携化に対応した教育方法の改善、施設設備の整備を進める。

入学時 Open Yourself 心を開き、殻を破る	導入教育・共通教育 主に 1，2 年次 （全学共通科目、外国語科目、学科導入科目）	専門教育 主に 3，4 年次 （専門教育科目、副専攻、全学共通科目・外国語科目の一部）	**卒業時** Open Your Future 自ら未来を拓いていく
他者を受け入れ信頼することから出発する。	他者との関わりの中で自己の役割を見出し、学び合う。	学び合いを通して知識と思考を深め、他者に発信する。	主体性を持ちながら、自己の強みを活かして他者と協働できる。
	多様な人々、多様な文化を理解する。	多様性の理解に基づき、地域や社会と関わっていく。	多様性を尊重し、思いやりの心をもって社会に貢献できる。
自身を枠にはめず、好奇心をもって、積極的に物事に取り組み、学んでいく。	成長し続けるための土台をつくる。 ・情報技術を理解し、情報を正しく収集する。 ・人間及び人間を取り巻く環境（社会・歴史・自然）を学ぶ。 ・言葉の力を高める。	成長し続ける意欲と力をつける。 ・情報を主体的、批判的に把握し、利用する。 ・人間を取り巻く環境に自己を位置付け、課題を発見する。 ・知識をもとに論理的に考えて表現する。	生涯にわたって学び続けることができる。 ・情報技術を理解し、主体的に活用できる。 ・課題を見出して解決策を提案できる。

◇松蔭中学校･高等学校◇

I. 教育理念

松蔭中学校、松蔭高等学校においても、学院モットー「一粒のからし種」（A Grain of Mustard Seed）に込められた理念を土台として教育活動を行うとともに、スクールモットー “Open Heart, Open Mind” の精神をあらゆる機会に活かし、グローバル社会を生き抜く「勇気」と「知恵」を兼ね備えた女性の育成をはかる。国籍や人種・民族・宗教・性別の違いなど「隔ての壁」を乗り越え、多様性を認め合い、互いの存在をリスペクトできる人材を育成することを目標とする。

Ⅱ．中学校、高等学校の中期ビジョン

１．教育活動全般の検証と改善

2021 年度中学入試は大変厳しい結果に終わり、中学入学（予定）生数は 73 名となった。生徒募集、すなわち学校への「入口」を中学 DS、中学 GS、高校入学の 3 領域に分類すると、入学者数は、前年度比 DS は 4 割減、GS は 6 割増、高校入学は横ばいという結果となった。2016 年に策定した中高の中期経営計画「ビジョン 130」では、中学入学生 130 名、高校入学生 140 名とし、6 学年在籍生徒数 810 名の規模を計画したが、これを大きく下回る数字となっている。校納金収入の概算減収額は、「ビジョン 130」で想定した学校規模から見ると、2021 年度はマイナス 1.2 億円を見込む。

今後、下記５項目に掲げる学校の「入口」「中身」「出口」や財務に関連する事項につき、改善計画を策定する。様々な面での教育作りの体制を再構築するとともに、それを担保するハード面（スタッフ、施設設備）を維持する。中学入学生数減少を食い止めるため、オープンスクールや校内説明会等への動員をはかるとともに、併設型中高一貫校として、高校入学生を増加させる策を講じる。

① 入試状況の分析と今後の予測、生徒募集対策や中学、高校それぞれの入試制度の再構築。
② 英語力や学力の客観的な点検と向上策、探究型学習の推進など学習指導法の再構築。
③ 学校推薦型選抜（指定校推薦）、総合型選抜（AO 入試）への対応と、大学入学共通テスト受験など進路指導体制の再構築。
④ 各部署での中核教員の育成と優秀な教員の確保。
⑤ 財務状況の悪化に対する施策と高校募集増員など「ビジョン 130」の修正。

２．学校改革の方向性

「ビジョン 130」にもとづく学校改革プランは、2018 年度からの土曜授業と、2020 年度からの中学ストリーム制導入として実現しつつある。また、初めて学校のミッションステートメントとしての 3 ポリシー（アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシー）を定めた。創立 130 周年を迎える 2022 年は、中学ストリーム制の完成年度となり、翌年度より高校新コース制が始まる。改革の方向性としては、中学 GS を中心に各方面の高い評価を得ているが、感染症拡大のなかでの生徒募集活動は困難を極めた。ストリーム制への移行とともに、全学年の教育活動において PDCA を実施し、教育活動全般の改善をはかる。旧課程（ストリーム制導入前の課程）を運用する学年の教育活動においても、今後の学校全体の方向性として上述のポリシーを反映させ、教職員全員が共有するガイドラインとする。

３．2022 年度までの教育目標

（１）新学習指導要領への移行と探究学習の本格導入

新学習指導要領は、2021 年度中学で一斉移行、高校は 2022 年度入学生より年次進行で実施される。この新課程をふまえた授業シラバスにより、教育課程を運用する。学力の３要素（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」）を育成すべき資質・能力とし、評価の観点も対応させる形にするのが新課程の理念である。各教科授業においても、「総合的な学習の時間(中学)」「総合的な探究の時間(高校)」においても、学力の３要素を身に付けるべき教育目標の３つの柱とし、それぞれの指導方法も定めたうえで評価を行うことができるようにする。また、探究学習の取り組みを中高の各教科科目、総合的な探究の時間に導入する。中学ストリーム制においては、すでに GS「GL 探究」授業で本格的に展開しており、これを充実させる。なお、2016 年以来、学校改革の中心となり、土曜授業、ストリーム制導入など学校改革の主体となっていた全学教育構想委員会を解散し、「新カリキュラム委員会」を設置する。この委員会は、2021 年度から 2024 年度までの期間の、旧課程（中学ストリーム制・高校新コース制導入前）から、高校新学習指導要領の課程の学年、高校新コースによる課程の学年への移行を担うとともに、学習指導体制の再構築のための諸事項を検討する組織とする。

（２）ICT 教育の展開

新設するマルチメディア委員会は、インターネットを介したあらゆるデジタルデータの送配信体制の整備、リアルタイム・オンライン授業・交流を可能とするシステム整備をすすめ、ICT 教育、情報教育の基盤づくりをすすめる。学校の貸与タブレットを含めて、一人一台の ICT デバイス保有を前提に、教育活動への ICT 活用を一層推進し、学習効果を向上させる。社会の様々な分野での IT 化の成果を、生徒のスキルとして身に付けさせる。デバイスの使用モラルを含めた情報リテラシーについても、常に意識し指導する。

（３）中学ストリーム制の完成

ストリーム制では、教育の柱（Main Stream）として、聖書（Bible）、言語（Language）、グローバル思考（Global Mindset）・勇気（Courage）・知恵（Resourcefulness）の５つをキーワードに、DS(ディベロプメンタルストリーム)と GS(グローバルストリーム)それぞれの教育課程を運用する。２つのストリームは、英語を学び、英語を通じたグローバル感覚の育成をはかることができるようにし、授業を通じて生徒の五感に訴えかけながらより主体的な学びを促す。

DS においては、英語４技能をバランスよく身につけ、CEFR A1～A2 レベル（英検 3～準 2 級）の英語力を持ち、グローバル社会を生き抜く女性としてふさわしい知識・スキル・心身の基礎を身につける。また、様々な体験プログラムの学習から、社会の様々な方面に目を向け、人との関わりの中で他者を思いやる心を育て、自分の考えを言語化できる力を持つ。コミュニケーション力を柔軟に発揮でき、国際的視野を持った人物として、高校新コースの学習の取り組みの基礎を身につける。また、平和、人権など国内外の様々な問題に目を向けようとする姿勢を持つ。

GS では、国際理解に富み、CEFR　B1 レベル（英検２級・GTEC960 程度）以上の英語力を習得し、日常英会話であれば臆することなく話すことができる実践力を育成する。日本語と英語の両方で、ICT ツールを利用したデータ分析やプレゼンテーションを行うことができ、どのような課題であっても分析し(課題発見力)、思考、判断し（思考力・判断力）、その解決のために立案し(計画力)、実行できる力(目標達成力)を備える。また、他者との関わりや集団での対話において、相手を尊重しながら自分の主張を伝えて円滑に議論を重ねることができ、さらに、ファシリテータ（進行役、調整役）も担うことができるようにする。

（４）高校新コース制の準備

2023 年度からの新コース制導入の準備を行う。新コース制では、中学ストリーム制から継続して５つのキーワード（聖書、言語、グローバル思考、勇気、知恵）を意識した教育活動を行う。LS（ランゲージ＆サイエンス・コース）、AA（アスリート＆アーティスト・コース）、GL（グローバルリーダー・コース）を設置するが、各コースでは大学進学をみすえた教育課程を編成するともに、英語力育成を共通目標とする。

LS コースは、文系科目、理系科目の両方で探究型授業や体験型授業を取り入れ、主体的・対話的で深い学びにつながる教育を実践する。国語・英語を中心に、一人ひとりが持つ言語力をさらに高いレベルへと向上させるため、傾聴、論理的思考、発話等のトレーニングを行う。英語は 4 技能５領域（聞くこと"Listening"、読むこと"Reading"、話すこと［やり取り］"Spoken Interaction"、話すこと［発表］"Spoken Production"、書くこと"Writing"）について指導し、実践的なコミュニケーション力を育成する。ＩＣＴデバイスを適切に活用するスキルを持ち、生涯を通じて自ら学習者として生きる方法が身につくように指導する。また、キャリア教育を通して、一人ひとりの社会に対する視野を広げ、社会とつながる意識を育む。

AA コースは、様々なスポーツや芸術活動などに取り組む生徒を支援し、高校での学習と学外での個々の活動を両立させながら、大学進学を目指すコースである。平日放課後の時間帯、や土日曜日は各団体の活動に参加できるようにする。他コースのように土曜授業は実施しない。校内でのクラブ活動には原則として参加せず、個人の大会参加や強化プログラム参加など活動状況に応じて様々な学習サポートを行い、学習と単位習得を可能にする。ICT デバイスを利用したオンライン学習もできるようにする。定期的に開講する「AA 特別講座」では、コーチング、リーダーシップ論、栄養学の専門家や、各界著名人による特別講義を受講し、広い視点に立って見識を深め、世界に通用するレベルの各自の専門種目、分野のエキスパートになることを目標とする。将来的には、指導者となることなどセカンドキャリアに生かすことができる教養の基盤を養成する。

GL コースは、中学 GS からの内部進学生、帰国生等の在籍を前提に、グローバル社会で求められる十分な英語力だけでなく、必要とされる力、特にコミュニケーション能力・ICT スキル・柔軟な論理的思考とその表現力等を育成する。生徒主体の PBL（課題解決学習）や探究型学習の取り組みにより、リーダーシップと協調性を育成しつつ、学びの成果を日本語と英語で学内外へ発信する。国内外で多様な人々と関わり、その背景にある文化を理解し、尊重できるようにし、グローバルな視野に立ち、自己のアイデンティティー形成の礎となる学習や体験の機会を設ける。また、「グローバル人材育成の観点から、国際バカロレアの普及・拡大の推進」（文部科学省 HP）をはかる教育施策にもとづき、その理念を活かした教育を推進する。

４.「英語の松蔭」ブランディングのための特色ある活動

「英語の松蔭」は 2016 年以来、キャッチフレーズとして広報活動に利用し、徐々にブランディングが成功し、浸透してきた。小学生向け英語講座「松蔭 ELS 講座」は、中学 DS での英語学習に無理なくつなげるビギナーコースと、中学 GS 合格をねらうインターミディエイトコースの 2 レベルに分かれ、本校の英語科教員が指導している。聖公会系のインターナショナルスクール（聖ミカエル国際学校、SMIS）で実施する、高校生対象の土曜学校スクールアシスタントプログラムや、中学 GS で毎週土曜日に運営される SMIS 提携授業は、英語イマージョン教育の一環として行う。English Room は、昼休みと放課後に開室し、常駐するスタッフと英語で気軽にコミュニケーションをとることができる。

５．130 周年記念事業など

創立 130 周年に向け、ICT 設備の整備、中規模教室整備および同窓会活動の支援を行う。同窓会館は耐震強度不足により使用を中止し、校内に同窓会本部を移設している。「同窓会活動支援委員会（仮称）」は、同窓会費徴収や卒業生の校内施設利用など、さまざまな活動を学校として支援する。

以上